

三陸現地審査報告書

菊地俊夫・竹之内耕、柴田伊廣（記録）

期間：平成 25 年 8 月 19 日～21 日

主な参加者（所属）：

山本正徳（三陸ジオパーク推進協議会会長）・小林 真（八戸市長）・豊島正幸（三陸ジオパーク推進協議会学術専門委員）・高村 潤（八戸市まちづくり文化スポーツ観光部観光課）・関川詩帆（八戸市まちづくり文化スポーツ観光部観光課）・高橋瑛子（環境省八戸自然保護官事務所）・越後浩一（青森県総務部生活再建産業復興局）・高橋 昇（八戸市文化財保護審議委員）・関下 斎（日本野鳥の会青森代表）・柳沢卓美（種差観光協会会长）以上、八戸地域、山内隆文（久慈市長）・澤里允男（久慈市産業振興部長）・久保司（久慈市産業振興部商工観光課長）・中野創一郎（久慈市産業振興部商工観光課）・植田民夫（北三陸大地の恵み・ジオパーク推進協議会会長）・黒沼忠雄（北三陸大地の恵み・ジオパーク推進協議会事務局長）・田高正博（久慈市産業振興部商工観光課ジオパーク研究員）・佐々木和久（久慈市産業振興部商工観光課ジオパーク研究員）・向 正彰（久慈琥珀代表取締役）・滝沢利夫（久慈琥珀係長）・熊谷郁夫（岩手県県北広域振興局産業振興課長）・廣田悠人（岩手県県北広域振興局産業振興課主事）以上、久慈地域、堀川孝男（田野畠村政策推進課長）・渡辺謙克（田野畠村政策推進課主任主査）・道合勇一（NPO 法人 体験村・たのはたネットワーク理事長）・楠田拓郎（NPO 法人 体験村・たのはたネットワーク事務局長）・武井俊樹（NPO 法人 体験村・たのはたネットワークコーディネーター）以上、田野畠地域、竹花敏明（岩泉観光ガイド協会理事）・畠山幸男（岩泉町商工観光課）・有原隼人（岩泉町政策推進室）・田鎖康之（岩泉町教育委員会）・熊谷貴理子（小本振興協議会地域振興推進員）・和山欣彦（岩泉商工会主任）・葉佳奈絵（岩泉商工会）以上、岩泉地域、山本正徳（宮古市長、三陸ジオパーク推進協議会議長）・元田久美子（社団法人宮古観光協会学ぶ防災ガイド）・松本勇毅（たろう観光ホテル社長）・松館仁志（宮古市産業振興部商業観光課長）・山崎俊幸（宮古市産業振興部商業観光課主任）・櫻庭祐輔（環境省宮古自然保護官事務所）・伊藤栄利子（浄土ヶ浜ビジターセンター）・福井慎之助（岩手県立宮古高校学生）・八木澤雄一郎（岩手県立宮古高校学生）・杉山了三（岩手県立宮古高校教諭）以上、宮古地域、小川廣文（椿の里・大船渡ガイドの会会长）・森るり子（椿の里・大船渡ガイドの会）・佐々木紀子（椿の里・大船渡ガイドの会）・久保井喬（環境省自然保護官）・佐藤悦郎（大船渡市立博物館）・松渕 知（大船渡市商工港湾部長）・鎌田征喜（大船渡市商工港湾部商業観光課課長補佐）・熊谷真美（大船渡市商工港湾部商業観光課）・斎藤淳夫（岩手県沿岸広域振興局長）・及川真吾（岩手県沿岸広域振興局産業振興課主査）・青柳 天（岩手県沿岸広域振興局大船渡地域振興センター副局長）・佐藤裕紀（岩手県沿岸広域振興局大船渡地域振興センター主事）以上、大船渡地域、加藤宣夫（気仙沼観光コンベンション協会ガイド会長）・橋本茂善（気仙沼

観光コンベンション協会事務局長)・熊谷俊輔(気仙沼観光コンベンション協会推進課長)・小松勇次(唐桑町観光協会事務局長)・熊谷 羊(唐桑町観光協会事務局員)・畠山修(気仙沼市産業観光課長)・佐藤和明(気仙沼市産業観光課課長補佐)・上野健児(気仙沼市産業観光課技術主幹)・斎藤英敏(気仙沼市産業観光課主幹)以上、気仙沼地域、高橋 誠(三陸ジオパーク推進協議会事務局参事)・植野歩未(三陸ジオパーク推進協議会事務局長)・松本 潤(三陸ジオパーク推進協議会事務局)・関 博充(三陸ジオパーク推進協議会事務局)・斎 宏行(三陸ジオパーク推進協議会事務局)・三浦幸恵(三陸ジオパーク推進協議会事務局)

見学地点

蕪島、種差海岸、久慈琥珀博物館、小袖海岸、のだ塩の工場、サッパ船アドベンチャーズ(羅賀~北山崎)、宮古層群、茂師海岸、三王岩、田老防潮堤、たろう観光ホテル、浄土ヶ浜、大船渡市博物館、碁石海岸、唐桑半島ビジャターセンター津波体験館、唐桑半島

現地審査のまとめ

1) ジオサイトと保全

「悠久の大地と海と共に生きる～震災の記憶を後世に伝え学ぶ地域」のテーマを理解できるさまざまなジオサイトがある。とくに、東北地方太平洋沖地震が引き起こした大津波によって破壊された防潮堤・建造物・樹林などの災害遺構、津波石や明治時代以降の津波記念碑など歴史的に断続的に見舞われた津波災害を物語るものがあり、防災教育に活用すべきジオサイトが多数ある。また、歴史的に繰り返されてきたプレート海溝型巨大地震と内陸地震による沈降と隆起の組み合わせで形成されたと考えられる、見事なリヤス式海岸と段丘地形があり、北山崎や鶴の巣で代表される断崖と小袖海岸や浄土ヶ浜などで代表される岩礁がある。段丘面では酪農や短角牛生産などの畜産が営まれ、リヤス式海岸の湾は良港となっている。岩礁海岸ではウニ、アワビ、カキ、海藻などの海産物が豊富で、岩棚を利用したウニ増殖溝もあり、番屋群(復元予定)、海女漁など伝統的な漁村の暮らしが残されている。一方、三陸海岸や北上山地の大地は、古生代シルル紀から中生代白亜紀にかけての多様な環境で形成された地層や岩石、化石があり、日本列島の形成が理解できる貴重な素材がそろっている。ゴンドワナ大陸の分裂移動と付加体の形成、それらの合体接合の壮大な歴史を読み取ることできる。鍾乳洞、琥珀、モシリュウ化石産地なども悠久の大地の歴史を語る素材になっている。長大な海岸線の大部分は、三陸復興国立公園であり、環境省により保全や教育活動などが図られている。また、いくつかのジオサイトは県立公園に、自然・文化の素材の一部は文化財にそれぞれ指定され保護されている。

しかしながら、学術的、教育的価値の高い素材が豊富にあるが、ジオサイトの定義やジオサイトと見学地の関係があいまいとなっている。このことが、ツアーシステム(見学地への来訪者の誘導)をつくる上での障害になっている。地元住民やガイド、学術専門部会、

教育交流専門部会のメンバーとともに、ジオサイトのストーリーや範囲、見学地の再検討を行い確定することが強く望まれる。ジオサイトの素材においては、歴史と文化が弱い感がある。しかし、花崗岩、砂鉄、たたら製鉄、南部鉄製品、闘牛、和牛ブランド、塩の道などに因果関係が認められ、それらの要素を含めることで三陸ジオパークをカバーできるジオストーリーを発展させていく可能性がある。琥珀の採掘、販売については、保存と活用のルールをつくり、資源が滅失しないような持続可能な利用が望まれる。

2) 教育・研究活動

地震と津波に関する防災教育（避難訓練を含む）は、学校、地域などで実践されており、この成果は、2011年の津波に対する避難行動に役立った。津波災害とは切り離せない三陸地域にはさまざまな震災の語り部や地域を学びながらの防災ガイドがいる。また、一方で、各自治体にいる観光ボランティアガイドや歴史・自然系ガイドが一定のガイド研修をへて、実際にジオサイトのガイドを行っている地域がある。これらの既存のガイドが実質的なジオパークガイドになれるよう、体系だったカリキュラムをもつガイド養成講座の実施が望まれる。さらに、各ジオサイトのガイドが一定のレベル（ガイド内容や伝達方法など）にそろえられるような研修の仕組みが必要である。また、各地にある大地、動植物、歴史などの豊富な素材が、因果関係を示すジオスオーリーとして組み立てられておらず、単に素材が合体されたガイド内容になっている傾向がある。ジオパークへの学術的・教育的な支援を約束している大学、環境省、研究機関、博物館、教員、専門家などの協力を得て、価値あるジオストーリーを構築し、ガイド内容に活用することが強く望まれる。各地域での復興の進展を考慮し、学校教育での防災学習を含むジオパーク学習を軌道に乗せることが望まれる。

3) 管理組織・運営体制

三陸ジオパーク推進協議会には総会があり、その下にブロック担当者会議が設けられている。すなわち、北部ブロック、中部ブロック、南部ブロックである。岩手県地域振興室が事務局を担い、岩手県宮古地区合同庁舎内に現地事務局が設置され、専属の5名の職員（事務局長1名、事務局員4名）が配置されている。3名の事務局員がそれぞれ北部、中部、南部のブロックを担当している。各ブロック担当事務局員は、担当の市町村に出向いて調整業務にあたっている。また、学術専門部会（大学、博物館、コンサルタント会社）が教育と調査研究について支援を行い、また、教育交流専門部会（観光関係団体）が教育・学習およびジオツーリズムについて協議を行っている。

協議会経費の財源は自治体負担金、環境省補助金、緊急雇用創出事業費などであり、事務局の人事費や活動費、広告宣伝費、ウェブサイト管理などにあてられている。ジオサイトの建設（ハード事業、ソフト事業）は、各市町村の単独経費や復興交付金などの震災関係補助金によって実施されることになっており、いくつかの自治体では、復興計画の中にジオパーク事業が位置づけられている。ジオパーク協議会の支部にあたる運営母体が設置されている地域があるが、すべての単位で運営母体が設立されることが期待される。

三陸復興国立公園の事業のなかに、三陸ジオパークとの連携が掲げられており、保全や教育活動、施設整備などの分野において環境省と協力関係がある。三陸沿岸に沿うみちのく潮風トレイルはジオサイトの遊歩道として利用されている。環境省自然保護官事務所が八戸、宮古、大船渡にあり、ビジターセンター職員、パークボランティアなどもジオパーク活動に関わっている。

4) 地域の持続可能な発展とジオツーリズム

種差海岸（八戸市）、宮古層群（田野畠村）、サッパ船アドベンチャーズ（田野畠村）、田老（宮古市）、小本（岩泉町）、碁石海岸（大船渡市）、唐桑半島（気仙沼市）などでは、ガイド団体が活動しており、ジオサイトを案内するリーフレットや冊子が発行されているところもある。先述したようにガイド研修を積み重ね、さらなるスキルアップが望まれる。これらの地域では、観光拠点やビジターセンター、博物館などに、ツアーシステムを考慮したジオパークやジオサイトの情報提供を行う場所を設ける必要があり、ジオサイトには野外解説板も必要である。震災からの復興がすすむにつれて、観光客が戻りつつある。地域住民や市町村は、復興の手段としてのジオパークを歓迎している。ジオパークのテーマにある大地と海を生業としている農業、漁業、林業関係団体のジオパーク協議会への加入が望まれる。ジオパークと関係を持つことにより、産物のさらなるブランド化に結び付くはずである。また、「さんまらーめん」、「五地層丼」、「のだ塩」のような地域の資源を利用した料理や食品が開発されている。今回、現地審査が行われなかつたジオサイトの地域住民へ、復興の進展を考慮しながらジオパークが地域振興にとって有効であることを訴え、ジオパーク事業への参加と活動の推進を呼びかけていくことが望まれる。

5) 国際対応

現状では、国際対応はほとんどなされていない。今後、野外解説板、リーフレット、ガイドなどにおいて外国語対応が望まれる。さらに、外国人向けのおもてなしの方法も考えていただきたい。

6) 防災・安全

ガイドツアーの開始にあたり、地震があった場合の注意事項が案内されている。また、サッパ船アドベンチャーズにあたって、救命胴衣の着用、運行中の注意、復路における雨合羽の使用などの案内がなされており、波や天候によって無理な運航はしていない。三陸復興国立公園の遊歩道や展望台、キャンプ場などは災害時における避難所の機能（広さ、貯水タンクの設置、バリアフリーの措置など）をもたせて新設や改良が行われている。